

## 大学院留学で得た最上の喜び

### 大学院留学の目的

大学院留学を志したのは、強烈な語学への劣等感からだった。もちろん、メディアと平和構築分野の職務経験で培ったものを学術的に深めたいという思いもあった。だが、あらゆる建前を除いて自分の本音だけに目を向けてみると、そこにあるのは、英語を駆使していても簡単に国境を越えていく人たちへの憧れと劣等感だ。

例えば、新聞記者時代の駆け出しを過ごした福島では、原発事故の状況を海外のジャーナリストに説明できないことがもどかしかった。東京に異動してからは記者会見の場で通訳がいるにもかかわらず、英語で質問している他社の記者に憧れた。社内で英語レベルを聞かれた際には、謙遜を装って「少しなら」と言ってごまかした。上司からは「こういうときは具体的な資格試験の点数を言った方がいい」と注意されたが、何も答えることができなかった。

JICAに転職してからも同じだった。当時は社会人7年目で日本語での業務なら一通りのことは自分一人で遂行できる。でも、相手国政府との英語会議は、相手の発言をほとんど聴き取ることができなかった。相手のユーモアに同僚が笑う中、自分はつられ笑いをするしかなかった。英語が堪能な社会人1年目の同僚に頭を下げて相手の発言内容を確認したこともあった。「日本語の壁にとらわれないで仕事ができるようになりたい」。その思いは、大学院留学の準備を進める上で大きな原動力になった。

実際に留学が始まってからは怒涛の日々だった。各学期で講義とゼミが三つずつあり、それぞれの授業で20ページ程の学術文献を最低10本は事前に読み込んだ。ゼミでの議論の準備や課題をこなし、1万2000ワードの修士論文も書き上げた。英語力は以前よりも格段に上がったと思う。だが、留学を終えて振り返ってみると、この1年間で得た最上の喜びは、英語力や学術的な知見ではない別のところにあった。それに気付いたのは、留学最終盤のある夜だった。

### フラットメイトと最後の夜

退寮日が近づいていた8月下旬、同じ寮の仲間達(フラットメイト)と宴会を催すことになった。北米や南米、東南アジアや東アジアから集った学生は計12人。同じキッチンシェアし、朝昼晩と食事のタイミングが合えば、その日の出来事や人生の悩みを話し込んだ(最年長だった僕は「Uncle Toshi(としおじさん)」と呼ばれ、主に聞き役だったけれど)。試験や課題が終われば、一緒に打ち上げをし、旅行にも出かけた仲だ。最後の夜は、各自が持ち寄った得意料理や各国の名物料理がテーブルを飾った。



日付が変わろうとする頃、スピーチタイムが始まった。1人3分間ぐらいで思い出や抱負を語るらしい。「水回りや夜間の騒音の問題でケンカしたことや互いの誕生日を祝い合ったこと……。各人が思い出と共に同じ時間を過ごしたフラットメイトへの思いを語っていった。



### 「感情の共有」を実感

ムードメーカーであるタイ人の女の子に順番が回ってきた。いつも明るい子なのに、その晩はずっと静かだったのが気になっていた。彼女は何かを言おうと試みるが、言葉にならない。両目に涙を浮かべ、嗚咽を漏らしながら絞り出した。

「皆と別れるのが、ただただ寂しい」

その一言にハッとした。周りのフラットメイトのほとんどがもらい泣きしていた。僕も同様だった。その時に気付いた。「僕は文化も母語も全く異なるけれど、お互いに『寂しい』と感じている」。それは確信に近いものだった。これまで日本でしか暮らしたことのない初めての経験。同じ時間と空間を共有してきたからこそ、「寂しい」という同じ感情を共有していると実感を持てた。国境を越えて仲間ができた証。これこそが留学することの最上の喜びなのだと思った。



この大学院留学日記も今回が最後になる。ロータリーの経済的な支援が無ければ、大学院留学は実現しなかった。応援頂いた方々に改めて感謝申し上げたい。今後も「メディアと人道」の両方に貢献するため研鑽を積んでいくつもりだ。